

首都機能移転県民フォーラムを終えて

首都機能移転促進県民会議が、首都機能移転に関する意見や要望を広く県民からお聴きするために実施してきた県民フォーラムが一段落したことから、平成 10 年 12 月 20 日に下野新聞紙に掲載されました、渡辺知事と馬場宇都宮大学名誉教授との対談結果についてご紹介します。

1. 県民フォーラム開催結果の概要

県民フォーラムは、平成 8 年から約 2 年間に渡り、県内広域行政圏単位で 10 回、また、女性を対象とした「女性フォーラム」及び小・中学生を対象とした「次世代・夢フォーラム」を各 1 回、計 12 回開催しました。参加した意見発表者は、124 名、地元選出の県議会議員は 44 名、傍聴者数は合計 2,620 名になります。以下に意見発表者及び発言内容の概要についてお示しします。

2. 意見の概要

- 意義や効果に関する意見 -

- 明治期の開拓の歴史を持つ那須野ヶ原は新住民を受け入れる土壌を有している。
- メリット・デメリット論については、国家何百年の大計といった視点で考えた場合、あまりにも枝葉末節な議論であり、そのことだけで善悪を判断するよりも、我々の子孫や新たな生活者が幸せな生活を営める地域とすることを考える方が賢明であると思う。
危機管理上では移転の必要性を認めるが、政経分離や行政改革などは首都を移さなければならないと考えている。
- 現在、村おこしなどで過疎化している地域での苦労話を多く聞いている。首都が南へ行った場合には、まず、過疎化現象が現れるのではないかと心配している。
- 首都機能移転によって、経済活動に活力がもたらされ、農業、工業、商業の全般にわたる地域産業の振興に図り知れない効果がもたらされ、また一面では芸術面、文化面、教育面からも大きなメリットを享受することが考えられる。

- 課題に関する意見 -

- 土地・水・環境問題等については、住民要望等を踏まえ行政としてしっかりと取り組んでもらいたい。
- 地域の連携が希薄になる中で新住民との融合、コミュニティ問題が不安である。
- 首都機能移転の内容について、その姿がなかなか国民に見えてこないことに不安を感じる。「小さな政府」「政経分離」「行政機構改革」「地方分権」などの具体が見えない。
- 自然対人といった構図ではなく、人も自然も大切であるといった立場である。
人も自然も共生できる地域づくり・地球環境が大切なことだと考えている。
- 国会が那須に来れば活性化にもなるし、地域振興にもつながると思うが、底辺で暮らしている人々の意見をどれだけ聞いているのか疑問である。ボトムアップによる移転がポイントである。
- 那須野ヶ原の 4 万から 7 万のうち、国有地はわずかに 400 ha であるといった逆転の発想をするべきである。白地地区、宅地近接農地は乱開発の恐れもあり、場所を決定する前に法律整備が必要である。
- 新首都が那須に来た場合、東京が経済・文化都市として発展していく。その交流ベルト地帯としての県南地域に与える影響などについても考えてもらいたい。

- 要望等 -

- 岐阜をはじめ他県が盛んに誘致活動をやっているのはメリットがあるからであり本県那須地域でも那須の良さを提示することで強力な運動を展開して欲しい。

- 首都機能移転といった歴史的チャンスを生かし、世界に誇れる栃木の自然と共生した快適で活力ある生活を送れるまちづくりを推進してもらいたい。
- 栃木県民が首都機能の移転により、いままで以上にふるさとに誇りが持て、強い絆で結ばれることにより、1つの栃木がつくられることを願っている。
- 那須地域ということで、この地域全体を公園の要素を備えた未来都市の建設ということで取り組んでいただきたい。だれでも親しめ、ゆとりを感じて羨望の的となるような都市づくりの実現をお願いしたい。
- 情報が断片的で十分に入っていない。賛否断定する前にもう少し情報がほしい具体的な説明、未来に対する夢を見せてもらいたい。

3. 対談の概要

12月20日下野新聞に掲載した内容から抜粋して紹介します。

那須地域への首都機能移転実現に向け、県民の意見を広く聴くため、栃木県首都機能移転促進県民会議（会長・渡辺文雄知事）の県民フォーラムが、10月31日の宇都宮をもって一巡した。国会等移転審議会的那須地域の現地調査も終わり、来年秋には同審議会の答申が予定される中、残された一年間の取り組みが重要になっている。

そこで、11月12日、県公館で渡辺知事と県民フォーラムのコーディネーターを務めた馬場信雄氏（宇都宮大学名誉教授）に、これまでの県民フォーラムの成果を踏まえながら、提起された課題や要望にどう対処し、那須地域への首都機能移転を促進していくのか、対談してもらった。

司会は戸田栄輔氏（下野新聞社常務取締役）

（戸田） 国会等移転審議会が九月三十日、移転先を選ぶ調査対象地域の一つ「北東地域」の現地調査の一環で、那須地域を訪れました。

各委員に直接「那須」について説明するよい機会だったと思いますが、視察に同行されたときの様子や感想をお聞かせください。

（知事） 那須岳中腹で那須地域全体を見ていただいたあと、那須野が原公園のサンサタワーでは、眼下に広がる国公有地だけでも約四百ヘクタールあり、その中の草地に木を切らずとも現在の「霞が関」がすっぽり入りますと説明しました。

那須野ヶ原を見た委員さんが「こんなに広くて人が住んでいない土地がなぜ栃木県には残っているのか」とおっしゃったので、那須疏水ができてから開拓が進んだ那須の歴史についてお話ししました。那須をよくご理解いただけたと思います。

意見聴取では、国が首都機能移転に関する国民の合意形成に努めること、現行法では不十分なので地価高騰を抑える十分な方策と乱開発を防ぐ立法措置を検討すること、そして審議会の答申後、たなざらしにならないこと、以上四点を強く要望しました。調査後の記者会見では、石原信雄会長代理が「緑に恵まれた広い平たんな土地で、資料で事前に勉強していた以上に素晴らしい。委員の皆さんも深い感銘を受けたようだ」と話してくれました。また「地元の熱意を感じた」とわざわざ言ってくれましたから、今回の視察は非常によかったと思います。

（戸田） 馬場先生はどんなことお話しされたのですか。

（馬場） 県民フォーラムでは、「千載一遇の機会を逃さず誘致活動を活発にやる」、一方で「自然保護の見地から現状のままでは反対」という両極の意見がありました。

これらを踏まえて「気掛かりなことはあるが希望の持てる改革に期待し那須地域への移転を推進すべきだし、それを通して国家的な事業に参画していく」というのが感触と申し述べました。その上で気掛かりなことだけを整理して、政府の国家的ビジョンが見えてこないこと、

共通意識として人と自然環境との共生は論議されているが、環境への不安があったことを紹介しました。また、今の農業や酪農が継続できるか、大資本の企業が出てきたら地元の中小企業や商店が成り立たなくなるのではないか、土地の値上がりをどう抑制するか、対象十六市町村の枠組みがこれからどうなるか、といった主に県北地区で提出された懸念も述べました。

どの会場でも情報不足に不満が出ましたので、筋の通った動かし難い理由を子供たちにも分かるように整理し、あらゆる手段と機会を通して周知させ、同時にこれらの課題をどう軽減し払しょくするか、そういう努力が引き続き大切だと申し添えました。

(戸田) 平成八年から県民会議が取り組んだ県民フォーラムは、県民から疑問や要望を聞き、首都機能移転を共に考える重要な機会だったと思います。開催趣旨を改めてご説明ください。

(知事) 首都機能移転という大事なことをやるわけですから、私自身、平成四年から各地で百回を超える講演をしております。その他に、いろいろな形で時間をかけ繰り返し可能な限りPRに取り組んでおり、県民フォーラムは二年間で十二回やりました。フォーラムでは広域行政単位でパネリストを選んでもらい、大勢の人たちと意見交換しました。これで十分ということはありませんが、それなりに成果はあったと思います。

もちろん懸念する意見もあります。特に自然との共生についての不安はまだまだ続くと思います。どこになにができるのか決まらなないと、自分の町にどのような具体的な影響があるのかわかりませんので、心配される方が多くて当然です。

できるだけ情報を出しますが、今の段階で出せる情報と出したくても中身のない情報があります。県民フォーラムは県内を一巡しましたから、これからテーマ別、市町村別に考えていければと思います。

(戸田) コーディネーターを務められた馬場先生は、フォーラム全体を通しどのような感想をお持ちですか。

(馬場) どの会場でも「情報不足で自分の考えがまとまらない」という発言がありましたが、最後の宇都宮地区(10月31日開催)では一つもありませんでした。安ど感が心の隅をよぎったというのがごく最近の感想です。またどの会場でも「県民の意向を十分くみ上げてほしい」という要望がありました。

さらに地域によって関心の度合いの違いを感じました。移転候補地の地区では水に関する論議がされましたが、ほかの地区では問題になりませんでした。また移転候補地では、先ほど申し上げたように身につまされる懸念が出されましたが、それ以外の地区では移転でどのような経済的、文化的な利点が獲得できるのか、獲得すべきなのかが論議の対象になって、首都機能移転の対応に地理的・空間的な隔たりが微妙に働いているという感想です。

また、女性フォーラム(昨年九月開催)では、「国家的な大事業であれば父祖伝来の土地や水も提供しなければならない場面も考えられる」という発言があり、前提条件があるにせよ、国全体を視野に入れた判断に心を打たれました。

また、子供たちの次世代・夢フォーラム(2月開催)では、小学生が「空も空気もきれいな那須に来れば、ゆとりもでき国の指導的な立場の人たちはいい考えが浮かびいい政治ができるのではないか」、中学生が「首都機能移転には必ず問題が起きると思うが、あらかじめ分かっているからこそ最新技術で乗り越えられる」との発表をしました。

女性フォーラムと次世代・夢フォーラムでも、私自身とても勉強させられたという思いがあります。

(知事) 夢フォーラムでは「那須の歴史をよく理解したうえで来てほしい」という趣旨の発言もあ

り、子供ながら本当にいいことを言うと思いましたね。

(馬場) 首都機能移転に深くかかわるのは子供たちなんです。その子供たちが立派な考えを述べている。日本の将来も期待が持てるんじゃないですか。

(戸田) フォーラムの中で出された気掛かりなことについて、県はどのように対処されていくのでしょうか。

(知事) 国が直接対策を講じるもの、県や市町村が講じなければならないもの、あるいは進ちょく状況に応じてとる対策もあるわけです。そのときも、学校とか、公務員住宅とか、大学病院とか、どこになにができるか分からないと具体的な対策は難しいですね。今の段階ですべてをクリアしはっきりさせることは無理ですので、そこは分かっていたきたいと思います。

ただ、現時点で考えられる不安とか懸念、課題には県の首都機能移転対策本部がいろいろなことに目を光らせ、適時適切に対策を取っていく。来春県域テレビもできますから、活用して理解を図ることだと思います。課題の中で一番心配するのは、自然環境の保全にも関係する土地対策です。今の法律では不十分だと思いますので、国は土地対策の理念として「計画なきところ開発なし」の思想を貫いてほしい。市町村が自分のまちづくりをきちんとして、理念に合わないものは来ちゃ困るとはっきり言う。そうすればいいまちづくりができるし自然環境も守れます。

それから60万人の都市があす突然、那須にできるという見方をされますが、そうじゃありません。首都が来るとすれば、福島空港を使うことになるので、本県から福島県にまたがる。そうすると茨城県も関係してくるでしょう。そういうふうにはクラスターを配することになれば、30年がかりで那須に来る人口はせいぜい30万人くらい。

そういう中で、分かっている課題を前向きに解決していくことだと思います。課題に対応していくためにも残された期間、さらに一生懸命、県民の合意形成に努めるということです。

(戸田) 馬場先生は、県に対してなにかご注文ありますか。

(馬場) 県民の間には、期待と不安が交錯していますから、その期待をどう実現し不安を除去していくのか。この解決のめどを県民に知らせていただくことが一番大切だと思います。さらに、知事さんに指導力を発揮していただきたいと思います。

(戸田) 今年六月、県は「那須新首都への提案」を発表しました。環境との共生が基本的な考え方なのですが、知事としてはどういう都市づくりをお考えなのでしょう。

(知事) 都市の仕組みとして、田んぼの中に5万人の町ができるとは考えていません。那須町や大田原市など既存の集積がある町を含めたクラスターがあちらこちらにできる。それが一番自然だと思います。

広いエリアに既存の町を中心としたクラスターをつくり、それを新交通システムで結ぶ。せいぜい半径数10kmの中に全部収まる。そうするといいまちづくりができますし、できるだけ木を切らないようにすることも可能と思っています。

そういうまちづくりのためにも住民参加が基本。農村と町がミックスし、お互いにいいところだけを持ち寄って都市と農村の良さを生かす。建物はとにかく低層。人口も既存の町の周辺に配置することを考える。

国の構想がもう一つはっきり具体化していない面もありますから、今われわれが考えていることを修正したり、強化したり、それぞれの町との相談の積み重ねの中で30年後にいい町ができればと思いますね。

(戸田) 「那須新首都像」を馬場先生どう思いますか。

(馬場) 自然環境との共生や新しい構想に満ちた都市ができるのではないかと評価しております。

最近県が作ったコンピュータ・グラフィックスを使った新首都像のビデオを見ましたが、こういう都市ならいいなという感じを持ちました。これからの県民の論議を踏まえながら、内容をより一層充実してくれたら、首都機能移転に関する県民の理解も早く進むのではないかと期待しているところです。

(戸田) 北東地域の関係五県知事は11月11日、国土庁を訪れて「利根川以北」をアピールされました。五県知事会議は今後どういう活動をされるのか、お聞かせいただきたいと思います。

(知事) 北東地域に山形県は入っていないですが、山形を含めた茨城、福島、宮城、本県の五県で行動しています。望ましいことではありませんが、結果的に東と西の引っ張り合いになる可能性が強いので、五県の連携を強化し、これから共同行動をとることが増えると思っています。

初めて五県知事会議を開いたのは7月末。共同パンフレットも作りまし、北東地域が移転先に最もふさわしい」という共同アピールも採択しました。国土庁にはこのアピール文を提出し、われわれ北東地域の取り組み状況を長官に訴えました。これからも5県で相談しながら着実に進めていきたいと思っています。

また、5県の県議会は、首都機能移転北東地域県議会連絡協議会を組織し、五県知事会議より以前に動き出しています。非常に活発に要請活動などやっています。

時が進むにつれ、手続きが進むにつれて、これからは東京都の存在が大きくなってきます。東京都は知事をはじめ都議会、都選出国會議員も移転に反対ですが、東京都としての災害対応をどうするか、また、政府機能をどうするかといった議論が阪神大震災以降、出てきつつあります。

それには東京都の関係者や政治家たちも耳を貸さざるを得ない。その論議がこれからの一年間、どう発展していくのかが注目のしどころです。

(戸田) 首都が西日本にいったら、東日本にとってはマイナス。だから山形県もスクラムに入っているわけですね。

(知事) 西に行ったら、首都との時間・距離がすごく長くなってしまいます。人口減少県が現在13県ありますが、そのうち9県は西日本です。西に都があったときは、北関東、東北は産業も文化も栄えなかった。歴史の事実はよく知っていますから、西はこの際なんとしても取り戻そうとします。善し悪しは別として誘致運動の枠を超えた地域ぐるみの構図になるでしょう。

そうさせないためにも、国民が納得できる科学的根拠を示しながら、北東地域、できたら那須に決まることが一番の理想なんです。

(戸田) 県民フォーラムは、県民の合意形成を着実に前進させたと思います。今後の県民会議の取り組みについてどうお考えですか。

(馬場) 県民フォーラムでは、新しい都市近郊の農業運営とか教育や研究機関、福祉施設の充実、新しいビジネスの創出、人や物あるいは情報の中継点としての役割がもたらす町の活性化の予測など、首都機能移転を地域振興につなげたいという積極的な課題意識がありました。それはいずれも、那須に首都機能が移転してくるという前提に立った明るい期待なんです。

そこで、私は、国土の均衡ある発展という立場に立ったとき、箱根から西は産業・文化が相当発展し成熟しているのに、首都機能が箱根を越えて西に行くことがいいのかどうか、国民的な意識を真剣に涵養する必要があると、フォーラムの司会をしながら考えました。均衡ある国土の発展という大きな立場は、国民も了解できると思います。

首都機能が西にいけば、本県はもちろん、本県以北の明るい期待はなくなるどころか、過疎化が進行したり経済や文化水準が落ちてくる懸念も予想されるわけです。こうなることを

避けるためにも、県民あるいは国民として、新しい都市づくりに積極的に参画して、那須地域への首都機能移転に向けて努力を重ねていくことが必要かと思います。

そのような状況をつくり出すためにも、県ならびに県民会議が、気掛かりな不安要素の実態を科学的によく調べ、この解決策や期待される未来像を具体的にし、さらにきめ細かな会合なども開催して効果的な情報を県民に流していただく。半面、市町村レベルで収集した県民からの情報を県民会議なり県が整理していただく。そういう県民の合意形成に向けた努力をしていただければと期待します。

またわれわれ県民も首都機能移転に関する情報を自分自身で獲得し、首都機能移転に対し一人ひとりの見解をつくり上げていく義務があると思います。

(戸田) 県民会議の会長というお立場でいかがですか。

(知事) 国会が来れば栃木県が経済的に大きくなるというような目先に捉らわれるわけではありません。馬場先生がおっしゃったように百年、二百年先の将来を考えますと、首都機能が箱根を越えることになれば北関東、東北の将来はないと思っているんです。それは歴史が示しているわけです。

県民会議の行動の中で、国には、国民全体の合意形成とか地価対策、また、「計画なきところ開発なし」という理念のまちづくりとかを腰を据えて、強く訴え掛けていきたいと思います。

もう一つこれからの1年間で大事なことは、東京都との関係です。東京都の理解がなければ北東地域への移転は進まないわけですから、国やわれわれ関係県がどう努力していくか。東京都との連携のとりかたは難しいんですが、知恵を出しながらやっていきたい。県民会議の今後の大きな仕事は、県民合意の形成と東京都との関係だと思います。

(戸田) きょうは、長時間ありがとうございました。